

## 博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学  
 研究科名 大学院人間科学研究科  
 申請者氏名 駒込 希  
 学位の種類 博士（人間科学）  
 論文題目（和文） アメリカにおける日系人差別とユダヤ人  
 —1906年から1988年を中心に—  
 論文題目（英文） American Jews and Discrimination against Japanese Americans, 1906-1988

## 公開審査会

実施年月日・時間 2018年11月14日・13:00-14:00

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館402教室

## 論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	森本 豊富	Ph.D. (Education)	UCLA	移民研究
副査	早稲田大学・教授	谷川 章雄	博士（人間科学）	早稲田大学	考古学
副査	早稲田大学・准教授	竹中 宏子	Ph.D. (政治・社会学)	マドリッド・コンプルテンセ大学	文化人類学
副査	下関市立大学・名誉教授	木村 健二	博士（経済学）	東京国際大学	経済学 移民研究

論文審査委員会は、駒込 希氏による博士学位論文「アメリカにおける日系人差別とユダヤ人—1906年から1988年を中心に—」について公開審査会を開催し以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

## 1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 本研究は通史的な研究であるが、歴史的変化が必ずしも明確ではないとの意見があった。

この意見について、1952年の移民国籍法改正以降、リベラリズムの主張の仕方に大きな変化が見られたこと、また、1970年代以降、市民的自由法の時代になるとユダヤ系の議員が議会で重要な位置を占めるようになり、政治的勢力も増してきた点がもうひとつの大きな変化であったと回答した。

- 1.2 ユダヤ系、日系の位置づけにどのような変化がみられてきたのか。それぞれの集団を一括りにとらえているが、もう少し細かに見ることができないのかとのコメントがあった。

このコメントに対しては、戦後になってユダヤ教離れが問題になってきており、ユダヤ系ということで一括りにはできなくなっているのも事実であり、この点に関しては今後の課題とする旨、回答があった。

- 1.3 邦字紙である『羅府新報』を在米日本人・日系人側のほぼ唯一の史料として利用している点に偏りが見られる。また、同時代の研究も見ておく必要があるのではないかと指摘があった。

この指摘に対して、同時代の他の邦字紙や研究に関して追加的に史料を調べるとの回答がなされた。

- 1.4 本研究の重要なキーワードとしてのリベラリズムの定義について普遍的な概念としてよりも機会主義的な柔軟なものとして位置づけて考えているように見受けられるが、その点を確認したいと問われた。

この点に対して、本研究が依拠した先行研究にはリベラリズムに関して柔軟な解釈がなされていることから、さらに考察を深めていきたいと答えた。

- 1.5 エスニック集団間の関係性の中で何が特徴的なのかとの質問があった。

この質問に対しては、市民的自由法の中でのユダヤ系の日系に対する支援という点は注目に値するので、さらに考察を深めたいと回答した。

## 2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 論文題目について、「アメリカのユダヤ人と日系人に関する一考察」では、本研究の内容を必ずしも反映していないため、内容がより鮮明になる題目に変更した方が良い。

- 2.1.2 在米日本人・日系人側の資料として『羅府新報』1紙だけでは十分といえない。同時代の他の主要な邦字紙などの史料も追加することが望ましい。

- 2.1.3 歴史研究としては、史料批判が不十分である。使用した史料についての批判的な視座を明確にすることを求める。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 主題を「アメリカのユダヤ人と日系人に関する一考察」から「アメリカにおける日系人差別とユダヤ人」に変更した。副題はそのままとした。また、英文タイトルも The Relationship between American Jews and Japanese Americans, 1906-1988 から American Jews and Disrimination against Japanese Americans, 1906-1988 に変更した。

- 2.2.2 邦字紙について、ロサンゼルス発行の『羅府新報』以外に、サンフランシスコ発行の主要邦字紙である『新世界』および『日米新聞』を追加史料として新た

に加えた。

2. 2. 3 本研究が依拠したアイゼンバーグ(Eisenberg, E.)の著書*The First to Cry Down Injustice: Western Jews and Japanese Removal during WWII* (2008)を批判的に論考し、ユダヤ系新聞『エマニュエル』(Emanu-el)および『ブネイ・ブリス・メッセンジャー』(B'nai B'rith Messenger)の史料批判を行い、邦字紙についても3紙にすることによって偏りが少なくなるように努めた。

### 3 本論文の評価

#### 3. 1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：

本論文は、1906年から1988年にかけてのアメリカのユダヤ人と日系人の関係について、日系人差別へのユダヤ人の反応を手がかりに考察したものである。在米日本人・日系人に対する差別は1906年のサンフランシスコ日本人学童隔離学校問題以降、日米紳士協定(1907年～1908年)、外国人土地法(1913年、1920年)、排日移民法(1924年)、そして戦時期の強制収容へと続いていく。しかし、戦後には日系人二世を中心とした補償運動とユダヤ系をはじめとするマイノリティ側からの支援が功を奏し、レーガン大統領が1988年に市民的自由法に署名した。この80数年間に、ユダヤ系アメリカ人が日系人に対してどのような反応を示したかを明らかにすることが本論文の研究目的であり、問題設定としても妥当である。

#### 3. 2 本論文の方法論(研究計画・分析方法等)の明確性・妥当性：

本研究は、文献資料を丹念に読み解いたエスニック集団間の社会史研究である。戦前期についてはユダヤ系および日系のエスニックメディアとしての新聞を検証し、戦後に関してはアメリカユダヤ人会議、アメリカユダヤ人委員会、反名誉毀損同盟の公聴会におけるユダヤ系団体の意見書などや議事録を検証している。ユダヤ系と日系両方から双方をどのように関係づけていたかといった点を理解する上では、妥当な方法であると判断できる。また、改稿された論考においては、先行研究や史料を批判的に考察しつつ新たな見解へと導き出している点が評価できる。

#### 3. 3 本論文の成果の明確性・妥当性：

本研究では、アメリカにおける日系人排斥と権利回復に対するユダヤ人の反応を、戦前から戦後にかけて丹念に追究した点に最大の成果があり、その背景、すなわちアメリカ社会におけるユダヤ系集団の位置づけとその変化、また、アメリカ社会への順応としてのリベラリズムの内容にまで立ち入って分析している点が明確であり、妥当性が認められる。

#### 3. 4 本論文の独創性・新規性：

日本における移民研究、アメリカ研究、マイノリティ研究では、在米日本人・日系人和其他のマイノリティ集団との関係に関する論考は限られている。特にユダヤ系との関係性に関する研究がほとんどみられない中で、その空白を埋める点で本論文は先駆的であり、独創性と新規性が認められ高く評価できる。

#### 3. 5 本論文の学術的意義・社会的意義：

3. 5. 1 アメリカにおけるマイノリティ集団間の関係に関する研究は増えてきてはい

るものの、在米日本人・日系人と他のエスニックマイノリティ集団との関係については寡少である。その中で本研究は新たな地平線を切り拓いた点において学術的意義が認められる。また、本研究はアメリカ研究、エスニック関係史、ユダヤ人研究、在米日本人・日系人研究の分野において貢献を果たすものとして評価できる。

- 3.5.2 戦前の一時期に限らず、戦時期、そして1980年代までを通して二つのマイノリティ集団間の関係性の変遷が扱われている点は価値があり評価できる。また、今後の移民研究やマイノリティ集団間関係を考察していく際に、本研究が果たしうる社会的意義も認められる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：

- 3.6.1 人の国際移動が進展し「時空の圧縮」が進む中で、異なるエスニック集団の接触は今後益々増えていくことが予測される。人間科学においても、人間の多様性を異文化間接触から考察することは重要な課題のひとつである。その課題への取り組み方は総合科学としての人間科学において様々なアプローチが考えられるが、単に現在の事象のみを扱うのではなく、時間軸をあてがう研究も求められる。歴史社会学的視座で異文化間関係を考察した点において、本研究には人間科学への貢献が認められる。

- 3.6.2 本研究は、在米日本人・日系人とユダヤ系アメリカ人が双方をどのように認識していたのかという点にまで踏み込んだことにより、現在の多文化共生社会および人間集団をより広く、深くとらえる視点にもつながり、人間科学の進展に寄与したといえる。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- (1) 駒込希(2017)「カリフォルニア州のユダヤ人と日本人学童隔離事件ー20世紀初頭のユダヤ系新聞を手がかりにー」『移民研究年報』第23号, 125-136頁. (第2章第1節に掲載)
- (2) 駒込希(2016)「在米ユダヤ人と日系人の戦後補償運動ー市民的自由法の成立過程を手がかりにー」『比較文化研究』第123号, 69-81頁. (第5章第1節、第2節に掲載)

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上